

## 第2学期終業式 式辞要旨 H29.12.19

終業式の挨拶では、いつも時のたつのは早いということから話し始めているように思う。長いと思っていた2学期が今日で終わる。過ぎてみれば早かったなあと思えるならば充実していたのだろう。

徒然草の話をよくするが、今日は方丈記の冒頭の部分に触れたい。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。」

これはあまりにも有名で、無常を象徴する文章だ。

枕草子と徒然草とこの方丈記が三大随筆と言われているが、鴨長明が書いた方丈記が一番短くて、原文だけを読むなら30分もあれば大丈夫だ。他の二つは何日もかかる。

これは受験古典としては記憶することが必須の冒頭部分だが、800年以上も前に書かれたのに、今も変わらぬ戒めである。私も58年余りも生きてきたので、人生の砂時計にはあとどのくらい砂が残っているのか知るよしもないが、改めて時間ほど大切なものはないとつくづく思う。

前置きが長くなったが、今日は二つのことを話す。

まず一つ目は、「頭がよいとは？」である。

世間一般では、記憶力や理解力が素晴らしく、学校のテストや入学試験で高得点をとる人のことを指しているように思っていないだろうか。

君たちも友人を評価して「彼は頭がよい」と言うときには、そういう意味で使っていると思う。しかし、本当にそうだろうか。

長く生きてみると、「頭がよい」というのは、知識がいっぱいあるということよりも、「先を読む力」があるということを指すと確信するようになった。

「先を読む」を別の言葉で言うならば、「戦略が立てられる」と言えるだろう。

剣道では、この先を読む力を「読み」と言い、この「読み」を十分に働かせるためには、攻め勝つこと、すなわち心の面で優位に立つことが必要だと言われている。

こちらが心で優位な状態なら、相手の心の動きは手に取るように分かるので、いくらでも相手を打てるようになる。

それと同じで、豊富な知識を蓄えていくと、「先を読める」ようになってくるのではないかと思う。

だが、知識ばかりをいくら身につけても、経験が無ければ「先を読む」ことはできない。

今までの日本の教育は、知識を得ることにばかり力を入れてきた。今頃になって、それだけでは世界から取り残されるということで、総合学習の時間や課題研究という時間

が設けられてきたし、講義一辺倒の授業から、グループワークを取り入れた授業に代表されるようなアクティブラーニングという授業に変わりつつある。

「先が読める」と言うことは、数時間後、数日後、数週間後、数ヶ月後、数年後、10年後、20年後、30年後に、今やっていることやこれからやろうとすることが如何なる意味を持ち、どういう結果をもたらすのか想像力が働くということだろう。

また、「俯瞰する」という難しい漢字の言葉がある。上から全体を見ると言うことで、宇宙船から地球を眺めるイメージで考えてほしい。逆の意味では「近視眼的にものを見る」とか「木を見て森を見ず」という表現がある。

「俯瞰する」ということを分かりやすく言うならば、物事を見ていくときに、自分の立った位置からだけ見るのではなく、ドローンを飛ばして周囲までも大きく見渡してみることが大切だと言うことだ。ドローンが発明されて以来、これまで見るのが不可能だった景色を見られるようになってきた。大きな滝や絶壁を真横から見るなどできなかったのに、今ではいくらでも見るできるようになった。

それと同じことが「先を読む」ということに当てはまるのではないかと思う。

今の君たちには、たくさんの知識を得ることと色々な経験・体験をすることが必要なのだ。それが君たちにとってドローンの役目を果たして俯瞰することに繋がって、物事の本質や全体像をとらえられること、そして先を見通して物事の戦略を考えられることに結びつくのではないだろうか。

商売で言えば、経営戦略やマーケティング戦略を立てる上で、「先が読める」か否かが勝負だ。

この話を聞いて共感できたなら、「先が読める」人間になろうと、貪欲に知識と経験を増やす努力をしてほしい。

二つ目は読書についてだ。

人類は色々な失敗と成功を繰り返しながら歴史を紡いできたのだから、「先を読む」ためには歴史を知らねばならない。

さらに、自然の摂理を学ぶことも大切だし、人の心理を知ることも大切だ。

「先を読む」ために必要となるそういった知識を得るためには、何と云っても読書は欠かせない。私には3人の子供がいるが、一番下の193センチのバスケット野郎は、読書と言えるのか疑問はあるが、マンガで知識の多くを得たようだ。やたらと「天才ですから」と言っていたのを思い出す。どうやら漢字もスラムダンクで覚えたらしい。そんな読書もありなのかもしれない。

私は玉島商業に転勤してきた昨年からは、JRを利用して通勤しているので、たくさん本が読めるようになった。

今年は、これまでに100冊を超え、まだまだ増えそうだ。通勤の一往復で読めるような新書の類いから、一週間では読めないような難解な本まであるが、大学時代に匹敵するくらいたくさん読んだ一年間だった。

ところが、読んだ本のうち、初めて読んだ本はどのくらいなのかを調べてみたら約3

割だった。要するに約7割は読み返した本だったということだ。中には、今年だけで3回も読んだ本がある。

そこで、本題である。

読書で大切なのは、自分にとっての「本物の本」を見つけたら、幾度も読み返すことだと思う。一度読んだくらいで、全部分かったような気になるのは大間違いである。

私がこれまでに一番多く読み返したのは「剣道講話」という三冊セットの書物だ。発行されてからの約25年間でおそらく10回以上は読んでいます。

30歳を過ぎた頃に出会ったのだが、この本は私にとって「本物」だった。だからこそ、迷ったとき、悩んだ時、うまくいかないとき、本棚にあるこの本に手が伸びたのだ。そして読んでみて、また勇気や意欲が湧いてきたものだ。

高校時代に源氏物語研究の第一人者だった村山リウという大先輩のお話を聞いたことがあった。「勉強というのは一冊の素晴らしい書物を手垢がつくくらい読み込むことが大切だ」とおっしゃったことを40年も過ぎたのにはっきりと覚えている。

そして、その話を聞いて以来、たくさんの問題集や参考書に手を出す友人たちを横目で見ながら、たった一冊の参考書や問題集を徹底して勉強したものだ。

ここまで生きてきて、40年前に教えていただいたことは間違いないと確信している。やはり、「本物」の言われることは、それこそ「本物」なのである。

最近「断捨離」という言葉がはやっているが、私の書斎の本棚にある一回しか読んでいない本をどんどん処分しようと考えているところだ。

色々な本の読み方があるだろうが、手垢がつくくらい、紙が変色しても手元に置いておいて、また読みたいと思わせてくれる本に出会ったら幸せだろう。そういう一冊に出会ってほしいものだ。

今日は、「頭がよい」とは「先が読める」ことであるということ、「手垢がつくくらい一冊の本を何度も読み返す」ことが大切だという話をした。

いよいよ高校生にとって一番うれしい年末年始がやってきた。3年生で就職する人たちは、人生最後のお年玉をもらうのだろうが、大切に使ってほしい。

また、久しぶりに会う親戚の方々も多いことだろうから、交流を深めてほしい。

学校の友人には、いやでも1月9日に会うのだから、お正月は血の繋がった方々との関わり、そして地域の方々との関わりを優先してほしい。

最後にいつも言うが、道路に出たら自分の命がかかっていること、人の命も預かっていることを忘れず、交通事故だけにはくれぐれも気をつけて、1月9日に元気に登校してきてくれることを願っている。